＜新収資料紹介＞

『本草盲目集』に寄せて～近世における見立絵本の流行～

嶌田　修（資料管理課）

◆はじめに

本稿では、先般購入した資料 『本草盲目集』（へ 13-4435）について紹介したい。本書は、東西庵南北作・勝川春扇画による全 15 丁の合巻（草双紙の一種）である。版元は甘泉堂和泉屋市兵衛、刊行は文政 2 年 (1819) とある。各丁には挿絵があり、また表紙は摺付表紙といって、全面に重ね刷りの技法による錦絵風の画が刷られた表紙（資料①）となっている。当時の合巻によく見られる造りだが、なかなか目を惹くものである。

資料①『本草盲目集』表紙

さて、本書のタイトルを見て、すぐに『本草綱目』を連想された方はそれほど多くはないかも知れない。『本草綱目』は明の時代の薬物（本草）書だが、それが日本へ伝来し、『本草綱目啓蒙』（小野蘭山述）や『和語本草綱目』（岡本一抱著､『広益本草大成』ともいう）などの関連書が出版されるなど、日本における本草学・博物学に大きな影響を与えた。『本草盲目集』が『本草綱目』のもじりであることは、タイトルの読みからそのように推察できるが、ここでは、そのような見立てについて触れながら本書を解説していきたい。

◆見立ての文芸

「見立て」とは、あるものをそれと似た別のものになぞらえて示すことである。パロディと言いかえてもよいであろう。本書は、タイトルにある「ほんぞうもうもく」を、「ほんぞうこうもく」という読みの音が似た別のものになぞらえて表現したものとなる。

このような見立ては、古くは『万葉集』の時代から行われてきた表現形式のひとつであるが、江戸時代になりより多くの作品が生み出された。例えば、井原西鶴による『好色一代男』などの浮世草子が流行した 17 世紀後半から 18 世紀中頃には、それになぞらえて「好色」という文字がつけられた書名の作品が増えたという。そして、浮世草子が衰退した後には、新たな趣向のひとつとして医学書になぞらえる傾向が強まったと言われている。『本草盲目集』は、そのような時代に生まれた見立絵本として位置づけられよう。

◆『本草盲目集』と『本草綱目』のあいだ

では、本書を詳しく見ていこう。作者の東西庵南北（姓は朝倉、通称は藤八）は、多くの合巻本を残した江戸後期の戯作者である。自序において、『本草綱目』には触れられていないが、以下のような記述がある。

「知恵をふるふて絵組にかかりしが、思へば百花鳥 奇妙図絵 鸚鵡石にそのおもざし能似たり」

ここに登場する 3 つの書名は、それぞれ『見立百化鳥』（漕川小舟作）、『奇妙図彙』（山東京伝作）、『腹筋逢夢石』（同）を指していると思われる。いずれもいわゆる見立絵本と言われるものであり、本書もその系譜に連なるものであると作者は述べている。本書の中身をいくつか示そう。

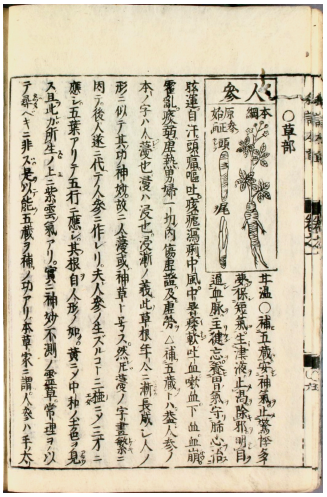
資料②③ともに、日用品などで鳥や人物を表現した（見立てた）、なんとも奇妙な戯画である。そこに添えられた文章は、画についての解説となる。中野三敏によれば、江戸中期に刊行された『見立百化鳥』を嚆矢として、以後この手の絵本が三都で流行するという。そして本書も、自序にあるようにそれらを参考に執筆・刊行されたのであろう。資料④は『百化鳥』の続編ではあるが、それと比べると類似性が高いことが分かる。

資料②『本草盲目集』 8丁裏–9丁表
本書全体を通して鳥を描いたものが多い。右側に見える鳥は「文鰞鳥」またの名を「こうまん鳥」とある。床の間に住み、読んだことがない『源氏物語』などの書物や、使ったことがない茶の湯道具などで描かれている。「こうまん」は「高慢」ということであろう。人々が持つプライドを揶揄したものか。

資料③『本草盲目集』 9丁裏–10丁表
粧室（身ずまい部屋）での六歌仙ということで、化粧道具などで各人物が描かれている。すき油が入っていた貝などで形作られた小野小町（右側手前）、おしろいや楊枝で表された在原業平（左側手前）などが見える。六歌仙は見立ての題材として用いられることが多かった。

資料④『見立百化鳥 続編』より

では、『本草綱目』のエッセンスはどこにあるのか。ここでは『和語本草綱目』を挙げてみる（資料⑤）。構成として画とその解説文があるという辞書的な形は変わらないが、この見立てと見るのは少々苦しいところであろう。また、『本草盲目集』の本文には一部『本草綱目』について触れられている部分もあるが、直接的な関わりは認められない。



資料⑤『和語本草綱目』より

このように見ると、本書の内容については、当時流行していた見立絵本を踏襲するものであり、一方、タイトルについては、やはり当時の新趣向に乗ったものと考えるのが妥当であろうか。それが同時代の出版および受容のスタイルであるとすれば、種々雑多なものがはびこる見立絵本のジャンルとはいえ、本館にまたひとつ時代を物語る貴重な資料が架蔵されたことになる。

◆おわりに

以上、本書の形式や外枠を主とした解説となったが、本書のような見立絵本は、他にも数多く当館に収蔵されている。以下にいくつかご紹介するので、もし興味をお持ちの方がいれば、「古典籍総合データベース」で検索して画像を見て楽しんでいただければと思う。本書の「序」に示されていた『百化鳥』の続編や『奇妙図彙』も読むことができる。

『見立百化鳥 続編』（文庫 31-A321）

『奇妙図彙』（へ 13-2822）

『絵本見立仮譬尽』（へ 9-4373）

『羽勘三台図会』（文庫 31-E289）

『腹筋逢夢石』3編（へ 13-2830）

何の見立てなのかは、読者それぞれの読みにお任せする。新たな発見があれば幸いである。

【参考文献】
中野三敏「見立絵本の系譜」（『戯作研究』中央公論社、1981 年所収）
福田安典『医学書のなかの「文学」』（笠間書院、2016 年）
国文学研究資料館編『図説「見立」と「やつし」日本文化の表現技法』（八木書店、2008 年）

※画像は「古典籍総合データベース」より